第６７回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会を通して

兵庫県立社高等学校
教諭　　徳平　　孝子

１　学校家庭クラブの概要

昭和２３年にホームプロジェクトと同時に家庭科教育に取り入れられた学校家庭クラブの活動は、学校や地域の生活の中から課題を見出し、課題解決を目指して主体的に計画を立てて実践する課題解決的な学習活動です。家庭科で学習した知識と技術を学校生活や地域の生活の場に生かすことができ、問題解決能力と実践的態度はもとよりボランティア活動など社会参画や勤労への意欲を高めることができるもので、学習指導要領においても引き続き、重視し一層充実させるよう明記されています。

全国高等学校家庭クラブ連盟は、県ごとの活動やブロックごとの活動が全国的な組織へと発展したもので、学校家庭クラブ活動を推進する役割を果たしています。毎年、本部の主催するホームプロジェクトと学校家庭クラブの研究発表大会が行われ、同時に全国の家庭クラブ員が一堂に会して総会や交流会を行う大変意義のある場になっています。

この第６７回大会が令和元年度、３９年ぶりに兵庫県で開催され、県立社高等学校の生徒が事務局を務めました。私は、事務局長を務めるにあたり、平成２７、２８年に兵庫県学校家庭クラブ連盟の事務局を担当し、同時に平成２７年県大会で発表、２８年に近畿ブロック代表としてホームプロジェクト部門で第６３回北海道大会の出場生徒の指導にあたりました。その後、３年間事務局としての仕事を行いました。

２　取組内容

（１）専門部の業務分担と生徒の学び

業務分担は、すべての加盟校に協力を仰ぎ、家庭に関する学科が各専門部を担当しました。各専門部の生徒委員長が生徒実行委員会で方向性を決め、大会のスムーズな進行のために、充分な練習と準備を整えました。

業務分担	専門委員長校	業務内容
第１専門部	県立社高等学校	総務、庶務、渉外、会計、昼食、司会進行 役員会、総会、生徒実行委員会、交流会
第２専門部	県立山崎高等学校	会場設営、危機管理、救護、美化、交通
第３専門部	県立西脇高等学校	受付、案内、接待、アトラクション
第４専門部	県立小野工業高等学校	研究発表、発表者誘導、スカラシップ、 オープニング
第５専門部	県立佐用高等学校	審査、表彰、賞品、大会記念品、販売、宅配便
第６専門部	県立松陽高等学校	広報、記録、DVD、展示、掲示、インタビュー FHJ 誌

平成３０年度は、実行委員会の生徒とともに、東京大会を視察し、その後兵庫県の研究発表大会を次年度のプレ大会とし、本番に使用する会場で業務分担し、生徒が実際に運営してみました。初めての経験に戸惑いながらも、次年度にむけての課題を見つけ、改善にむけての話合いや準備が本格的に始まりました。

（２）開催県の思い

「全国へ幸せ運ぶコウノトリ　笑顔と思いをつなげよう」のスローガンのもと、県下の加盟校の生徒が一丸となり、準備をすすめました。兵庫県は、阪神・淡路大震災の際に、全国の学校家庭クラブ加盟校から多大なご支援をいただきました。この時の全国の皆様からいただいたご支援に対する感謝の気持ちをこめました。当時を知らない教員や高校生に受け継いだものを伝え、その年がボランティア元年とされたように、ボランティアで人と人、人と地域がつながったようにそれぞれが協力し合い、笑顔を忘れずともに歩もうという前向きな思いをスローガンに込めました。そして、全国の皆様に復興した兵庫県を見ていただき、復興の過程で培った絆の深さや、高校生の社会参画力や無限の可能性を感じていただけるよう工夫をし、県下の生徒にも大会の意義とともに共有しました。

８月１日（木）		８月２日（金）
姫路市文化センター　小ホール	姫路市文化センター　大ホール	姫路市文化センター　大ホール
役　員　会	大会第１日	大会第２日
1　開会のあいさつ 2　大会実行委員長あいさつ 3　議長団選出 4　議長団あいさつ 5　議事 ①　平成 30 年度会務報告 ②　平成 30 年度決算報告 ③　令和元年度新役員承認 ④　令和元年度新役員代表あいさつ ⑤　令和元年度事業計画案 ⑥　令和元年度予算案 ⑦　令和 2・3・4 年度大会開催地について ⑧　令和 2 年度大会開催地代表あいさつ 6　感謝状贈呈 7　閉会のあいさつ	1　オープニング 2　開会式 ①開会のあいさつ ②国歌斉唱 ③家庭クラブの歌斉唱 ④大会実行委員長あいさつ ⑤主催者代表あいさつ ⑥共催者あいさつ ⑦来賓祝辞 ⑧来賓紹介 ⑨激励のことば ⑩祝電披露 ⑪連盟杯返還 3　研究発表 「ホームプロジェクト」 4　終了のことば １日目閉会 生徒交流会（小ホール）	1　総会 2　研究発表 「学校家庭クラブ活動」 3　アトラクション 4　ＦＨＪスカラシップ留学生報告 5　全国連盟事業報告 6　講評 7　審査結果発表 8　研究発表者表彰 9　閉会式 ①連盟旗授受 ②次期開催地生徒代表あいさつ ③次期開催地紹介 ④閉会のあいさつ

（３）家庭科教育の発展を目指して

学校家庭クラブの活動は生徒の活動ですが、全国連盟の主催する指導者養成講座などは文部科学省共催の教員の公式な研修の場でもあります。兵庫大会では、生徒だけでなく、全国の家庭科の先生方にも兵庫県の家庭科教育を見ていただきたいと思い、アトラクションと展示には、兵庫県の学校家庭クラブ活動の成果を披露しました。アトラクションは、平成１６年度沖縄大会において学校家庭クラブ部門で文部科学大臣賞を受賞し、文部科学省「目指せ！スペシャリスト」や「スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール」の研究指定を受けた県立西脇高等学校生活情報科の「播州織ファッションショー」でした。展示室には、家庭に関する学科を中心として各校の取組の展示と商品販売を行い、家庭に関する学科が１０年続けてきた東北ボランティアも紹介しました。生徒交流会の集会型と体験型ブースも県外の生徒と交流が深まるよう工夫しました。

ファッションショーでは、47 都道府県のイメージでデザインされたシャツを含め、100 着以上の作品が使用されました。中央の写真はコウノトリをイメージした、第 27 回全国産業教育フェア秋田大会全国高校生ファッションデザインコンテスト最優秀賞作品です。

展示室の商品販売、活動紹介の様子です。中央の写真は、県内クラブ員全員で制作した作品で、１つずつマグネットのつまみ細工を包装し、帰りに参加記念品として参加者に配布しました。

左の写真は全体の生徒交流会様子です。生徒が趣向をこらして考えた兵庫県にまつわるクイズなどで交流しました。右の写真は、体験型交流のワークショップで５種類のブースを用意しました。

３　取組の成果

大会に参加した生徒は、この大会を交流の機会として他校の活動から学び、様々な情報交換をしています。ここで得た、研究への情熱や感動は、各校の生徒へと伝えられ、学校家庭クラブの原動力ともなっています。大会運営に関わった生徒は、大会に限らずあらゆる場面で成長が見られました。以下は代表生徒の学びです。

> 家族や友人のために自分にできることを考え、全員で意識を変えていく研究をするホームプロジェクトと学校全体で地域と関わりながら地域活性化などの研究をする学校家庭クラブ活動の発表があり、家族とのつながり、地域とのつながり、人と人とのつながりなどのたくさんのつながりを感じることが出来ました。私自身は、学校内だけでなく兵庫県の多くの方々と関わり、自らが率先して動くことで、自分に自信が持てるようになりました。それと同時に、多方面に気を配る力やコミュニケーション力を伸ばすことができました。この力を大学生活でも生かし、もっと多くのことを学びたいと思っています。また、運営の中で兵庫県内の家庭科の先生の姿を間近で見ることができ、自分がなりたい教師像について深く考えることができ、高校の家庭科教員を目指す気持ちがより強くなりました。この大会で学んだことを次は教師として生徒に伝えていきたいです。
>
> （生徒実行委員長）

> 運営を通して私は二つのことを身につけることができました。1つ目は先を見て行動する力です。2つ目は協調性です。複数校の多くの生徒が動く中で、自分だけがわかって行動してもスムーズに進めることはできません。事前に担当校が集まり、役割分担された自分の仕事を完璧にするだけでなく、周りの人の手伝いもできるように支えあう気持ちをもってリハーサルを繰り返しました。それにより本番でも不測の事態にそれぞれの担当がしっかり対応することができました。これは、みんなの気持ちが一つの目標にむかった結果だと思っています。このような貴重な経験ができたことに感謝し、身についた力をこれから社会に出て、発揮できればと思っています。
>
> （第１専門部生徒委員長）

４　今後の課題

学校家庭クラブの活動は、まさに、新学習指導要領で示されている「主体的・対話的で深い学び」「課題解決に向けた能力の育成」「地域の実情等を踏まえた教育課題の実施・評価・改善を行うカリキュラム・マネジメント」等の理念が実践されています。

兵庫県では、家庭科の教員が在籍している学校すべてが家庭クラブ連盟に加盟しているわけではなく、すべての学校の家庭科の授業でホームプロジェクトや学校家庭クラブ活動が扱われているわけではありません。教員養成の大学の授業で学ぶわけではなく、家庭クラブの本来の意義を認識できるような働きかけが必要だと感じます。また、部活動の大会と同じように連盟に加盟するには、加盟費などが必要になるとともに、校務が忙しくなかなか指導に時間が取れないような学校もあります。生徒の学びを支えるため、家庭科教員自身が、周囲に活動を理解していただけるように PR する必要も感じます。

経験、体験を通して大きく成長するということは日々の活動で実感していましたが、それは生徒も教員も同じです。大会を経験したからこそ、今後も家庭科教員として家庭クラブ活動に力をいれ、少しでも、将来へつながる、地域から全国へつながるような活動に、生徒とともに取り組み、充実した高校３年間を少しでも支援できればと思います。